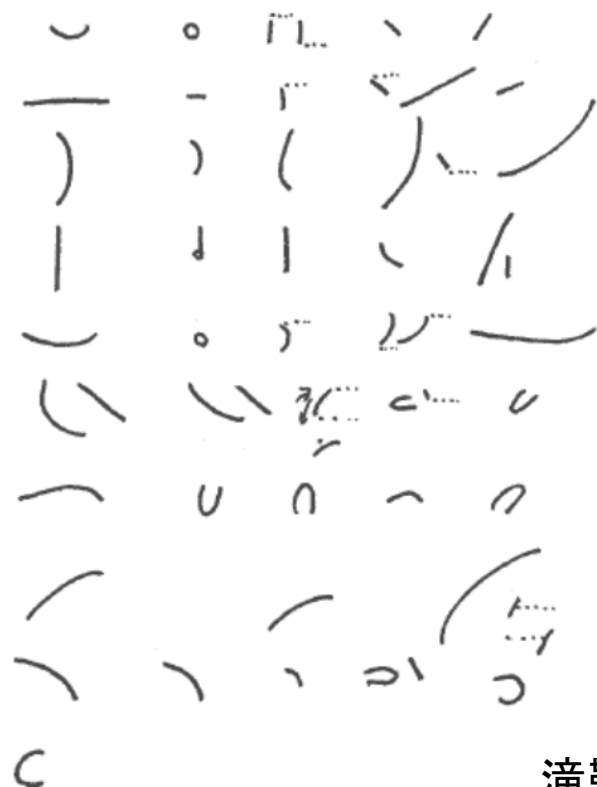
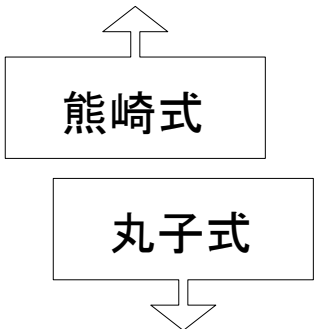


# 資料

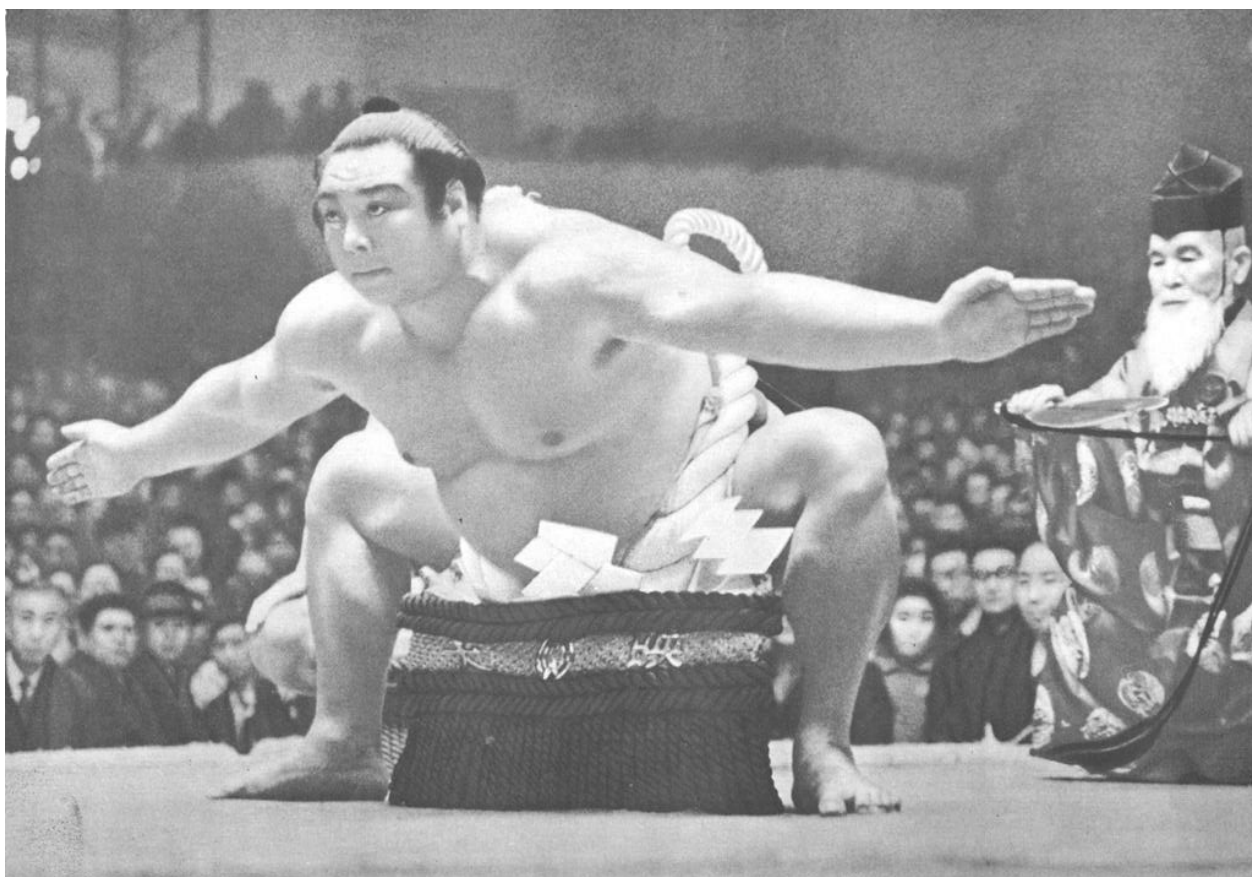


方式名	熊崎式
系統	田鎖・ガントレット
派	折衷
創案年代	明治39年
創案者	熊崎 健一郎

ガントレット式の発表は田鎖系に満足しない速記者の速記方式研究意欲を刺激しました。そうして習得した速記方式を積極的な改良に進む者を生むに至りました。そのような立場で独立をしたのが熊崎健一郎の熊崎式です。熊崎式は田鎖式の改良方式であるといってもよいでしょう。まず基本文字ですが、イ列の2倍をエ列、ア列の2倍をオ列にしました。ウ列は、ク、ル、ムが田鎖式のままであり、ス、ツ、フ、ユに新しい符号を入れています。現在、折衷派のほとんどの方式がア行とウ列を除いて熊崎式の基本文字を取り入れております。

方式名	丸子式
系統	熊崎・衆議院
派	単画
創案年代	昭和57年
創案者	倉嶋 宏

丸子式は倉嶋宏が熊崎式を独習中に衆議院式の符号に興味を感じて独自に研究をしたものです。昭和57年8月22日の速記科学研究会で西来路秀男が「丸子式」と命名をしました。



(不知火型) 吉葉山潤之助



証第一六七三号

速記士証書

倉嶋 宏

昭和十二年七月二十七日生

右者本会において社団法人  
日本速記協会速記士として  
適格であることを認める  
よつてこれを証する

昭和五十六年十月五日

社団法人日本速記協会





第 25 号

# 認 定 証

本籍地 長野県

氏 名 倉嶋 宏

日本耳鼻咽喉科学会ならびに日本リハビリテーション医学会主催、厚生省後援による昭和63年度言語聴覚療法担当者認定講習会を受講し試験に合格したことを認定し登録します。

平成元年 3 月 20 日

社団法人 日本耳鼻咽喉科学会

理事長

曾田 豊



日本リハビリテーション医学会

会長

今田 拓





丸 子 町

辞 令

丸子町大字上丸子二〇三二番地

倉 嶋 宏

教育委員会委員に任命す

平成十三年十月一日

丸子町長 堀内 憲明



# 表彰状

倉嶋 宏様

あなたは永年にわたり社団法人日本速記協会の活動に御尽力くださいましたここに速記百二十年記念の年にあたり感謝の気持ちを込めて表彰いたします

平成十四年十月二十六日

日本速記百二十年記念会  
会長 堀口卓也



# 受講証

倉嶋 宏 様

要約筆記ボランティア養成講座

あなたは右の講座を受講したことを証します

今後の御活躍を期待いたします

平成二十年三月一日

上田市社会福祉協議会  
会長 石川 幸



和・輪・話題の  
人

速記符号の研究一筋

倉嶋 宏さん (65)

丸子町上丸子



丸子町上丸子の倉嶋宏さん(65)は速記符号の研究一筋に生きてきた。昭和五十七年には「丸子式」を完成、日本速記科学研究会から認

証を受けている。

速記とは人の発言や自分の考えなどを「速記文字」というものを使い速く正確に書き記

す技術のこと。

速記を始めたのは高校時代。何でも書きとめておける速記の魅力に感じ、独学で熊崎式速記の練習を始めた。そ

## 「丸子式」考案、幅広い分野で応用

の速記方法だけにこだわらず各方式の速記の勉強も行い自分で改良も始めた。昭和四十五年には日本速記協会の速記能力検定試験の三級、同四十七年には同二級、同五十六年には同一級を取得した。厚生連鹿教湯病院のリハビリテーション部言語療法科に勤務する傍ら、主にボランティアとして速記業務を行ってきた。速

記は医療、文化講演、仏教講座など幅広い分野に及んでいる。

定年退職後の現在は依頼を受け速記業務を行っている。また丸子式の改良を含め外国語、融合符号、寓意符号など速記符号の研究に取り組み続けている。昨年十月には日本速記百二十年記念会から表彰を受けた倉嶋さん。「いかに線の数を減らしていけるかにこだわってきた。これからは丸子式の普及にも努めていきたい」と話し速記の研究や普及に生涯を捧げる覚悟だ。

(井出道)

東信ジャーナル 2003年1月23日(木) 掲載  
(平成15年)

## 素 養

元長野県厚生連リハビリテーションセンター鹿教湯病院  
リハビリテーション部言語療法科職員 倉嶋 宏

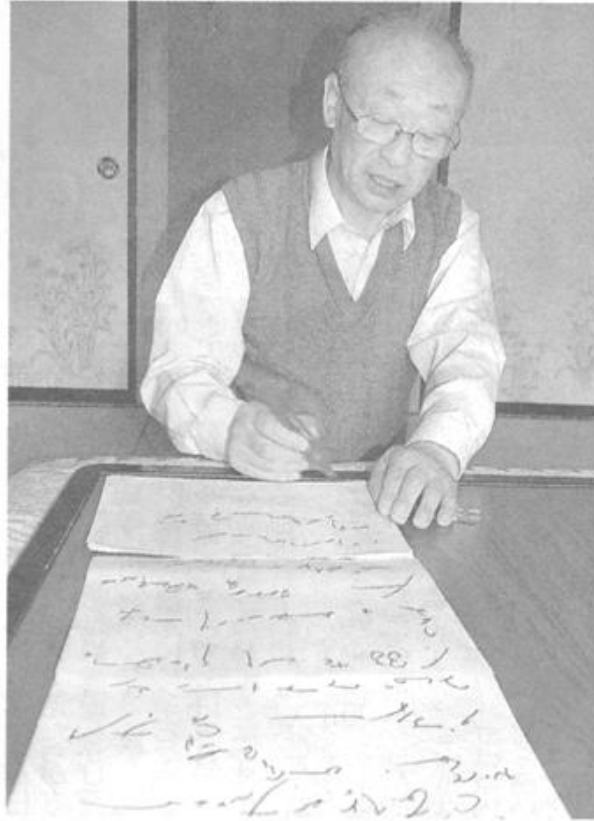
我が国では、医療機関や関連する福祉施設等に於いて、リハビリテーション医療のもとに言語聴覚士（以下、士と称す）が言語療法（言語障害児者に対する機能評価、並びに評価結果を基盤として綿密詳細に吟味し、計画された言語治療訓練）を行うようになって、まだ月日は浅い。それかあらぬか、巷で「エエッ、病院でどうして言語なの？」という疑問の声を聞くことも頻繁だ。即ち、世間一般の人々（以下、人々と称す）の把握している「言語」は、あく迄も一般社会に於る通則のジャンルとしての「言語」なのだ。従ってリハビリテーション医療下での「言語」というものを想像だにできないのは無理もない。私が言語療法を担当してした昭和55年の頃、地域の人々から次のような事柄を連続的に持ちかけられたことがある。順記すると、「PTA役員在任中に英会話指導を」「公民館落成祝賀カラオケ大会講評委員長を」「選挙に立候補した友人の応援演説を」「農水路工事関係の膨大な陳述書のふで字清書を」「地区支部成人学級の詩吟、民謡の各講師を」「経済評論家の講演の全語記録を」「新盆の時、僧侶来訪が遅れ、友人宅で合間の読経を」等々の依頼だった。依頼してきた人々は口々に、「天下の鹿教湯病院での言語従事者なんだから（依頼事例に関しては）造作なくできる筈だ、頼みの綱だ、頼むよ」と、恰もよくできて当然、適えてくれて当然だと言わぬ許りの口調。即ち「士」は言語堪能で音楽的素養を踏まえ、歌唱力もあり、雄弁で、書も達筆で、古典芸能諸般にも憧憬深く、長じ、速記記録能力をも保持し、更に、経文などにも精通しており、誦経能力をも備えている。という言

語関連領域に於て万能たり得て当然。というのが人々の常識的見解（以下、常識と称す）らしい。達つての依頼でもあり、無碍に断わりもできず、自信のなさを承知の上で受けてはみたものの、惨憺たる有様で終わったことは言う迄もない。恥辱心や慨嘆の情が増長する許りだった。併し、人々は大いに私を褒め称えてくれたものだった。なるほど、この事自体は言語療法上の「言語」とは似て非なるもので異質なジャンルでの「言語」かもしれない。併し、両者は、本当に「無関係だ！」と断じ得ようか。確かに、私は言語従事者ながらも、これらの常識を疎遠にしていたきらいがあった。のみならず、「言語療法を施行する上での基礎的な素養として不可欠なものなのだ。」ということに思いを致すことさえなかった。パラメディカルとしての「言語」は医学、看護学、言語病理学、心理学、統計学等々の学問的分野を基盤に構築されてはいるものだ。併し、言語療法での臨床的治療訓練の側面からは、この常識が不可欠なことは絶対に否定できない筈だ。学際的、学究的、雑学的であり、広大無辺な博学を持ってなる「士」に依って、はじめて言語障害児者へのより有効的なサービスは可能になるというべきだろう。「無関係だ！」と大上段に排他的に構え、等閑視する態度は「士」には許されまい。「士」はセクショナリズムに陥ってはなるまい。言語的教材や素材や技術として、当然「常識」は認識され直され、それが「士」のエッセンシャルな素養として具備されるものでなければならないものだ。「士」に望む、大いに切磋琢磨して、より万能なエキスパートたむことを。

## 上田の倉嶋さん 独自に「丸子式」も考案

# 速記一筋 50年

上田市上丸子の倉嶋宏さん(68)は「速記一筋五十年」。独自に改良を重ねた速記符号を「丸子式」として本にまとめようと励んでいる。高校生のころ「話を一回聞いただけですべてを記録できる魔法のような技術」のところに、独学で研さんを積んだ。本を通じて速記の魅力を広げたいと願いながら、「いつか速い漫才の掛け合いを書きたいね」と向上心は旺盛だ。



速記符号を使って、会話を次々と書き留めていく倉嶋さん

## 「速さ、美しさ追求 止まらない」

会話と同時に、横棒や波線、小さな丸などを手元の紙に書き付けていく。無造作に引いたように見える一本の横線を指さし「これで『ありました』と読むんですよ」。

倉嶋さんは、高校時代に速記を習い始めた。現・県厚生連鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院で言語療法の仕事をする傍ら、通信制大学で学習。速記にかかる時間は短くなったが、「日常の言葉や行動を絶えず速記符号に結び付けて」、人と話す際にも指を動かして練習。一九八一年、日本速記協会の検定で二級に合格した。

旧丸子町から講演会のテープ起こしを依頼されたり、病院勤務の中で患者の家族とケースワーカーのやりとりや会議の記録も頼まれた。一方、慣用句や新たな外来語を含め「より速く、どんな分野の言葉でも書き留められる符号を作りたい」と研究。ずっと悩んでいた符号が夢の中

で思い付いたこともあり、「まさに二十四時間速記を考えている」状態。「速さ、美しさ」を追求する心が止まらない。登山家が山に登ると似ているのかな」と笑う。

例えば「合併」は、一般的には四画の符号で表すが、倉嶋さんは平仮名の「つ」を左右反対にした一画の符号にした。包み込むようなイメージだからという。

倉嶋さんの方式は八二年、衆議院速記者養成所の西来路秀男名誉教授が「体系立っている」と認め、「丸子式」と名付けた。勤務先を定年退職し、合併で旧町教育委員の仕事も終わった

今、「丸子式」の教本や、ほかの速記方式をまとめて比較した本を出したいと考える。「レコーダーが進化しても、テープ起こしはやっぱり速記の方が速い」と倉嶋さん。「新しい符号を考えるのが止まらず、なかなかまとめられない」。速記への情熱は衰えそうにない。



## 上田市上丸子の倉嶋さん考案

### 「丸子式」速記 機関誌に紹介

#### 速記単画符号の体系確立にまい進

上田市上丸子の倉嶋宏さん(74)が自ら考案した「丸子式」速記が社団法人日本速記協会の機関誌「日本の速記」8月号に紹介された。倉嶋さんは「多くの既成速記方式と同列に、伝統ある協会の機関誌に掲載されて感激。今後も速記単画符号の体系確立に努めたい」と話している。

言葉を簡単な符号にして書き表す速記は参議院式や衆議院式、中根式、早稲田式など20を超す方式があり従来、議会や法廷の記録などに使われてきた。

倉嶋さんは丸子実業高校2年の時に「誰にも負けない武器を持ちたい」と熊崎式の独習を始め、27年後の昭和56年に日本速記協会主

考案した丸子式速記が紹介された機関誌を持つ倉嶋さん



催の速記実務能力検定試験1級に合格した。「いかに線の数を減らしていけるか」にこだわって速記符号の研究に没頭し、同57年には「丸子式」が日本速記科学研究会に認証された。同40年から36年間、県厚生連鹿教湯病院で聴覚言語療法業務に従事。そのかたわら人権医療、保健に関する講演会などの速記記録を数多く手がけてきた。

倉嶋さんは「ラジオなどで人が話すのを聞くと、自然に手が動き速記の符号が頭の中を流れてくる」という。「速記は人の言葉や自分の考えを即座に書き留めることができ、文章力向上や脳の活性化に役立つ。速記を通して手で文字を書くことの大切さを多くの人に知ってほしい」と願っている。

東信ジャーナル 2011年9月1日(木)掲載  
(平成23年)

## 上田の故倉嶋さんの著書

# 「丸子式速記」が完成



倉嶋さんの著書を持つ鈴木さん。右は孫の鈴木詩織さんが描いた執筆中の倉嶋さん

「丸子式」の速記を考案し、速記単画符号の体系確立に取り組んだ上田市上丸子の故倉嶋宏さんの著書「丸子式速記」がこのほど完成した。

倉嶋さんは2月20日に大腸がんのため77歳で他界。製本した著書が自宅に届いたのはその5日後だった。倉嶋さんの長女、鈴木良さん(39)＝同市中丸子＝は「最後まで改良を重ね、より良いものへと追求していた。父の仕事の形にして世に出すことができてよかった」と感慨深げだ。

文字を簡単な符号にして書き表す速記は熊崎式や衆議院式など20を越す方式がある。倉嶋さんは丸子実業(現丸子修学館)高校2年の時に速記に出合い、独学で勉強を続け昭和56年に速記実務能力検定試験1級に合格。翌57年には「丸子式」が日本速記科学研究会に認証された。

県厚生連リハビリテーション

## 改良重ね、より良いものを追求

ン鹿教湯病院で長く聴覚言語療法業務に従事し講演会などの速記記録も手がけた。「ラジオなどで人が話すのを聞くと速記の符号が頭の中を流れてくる」というほど熱中し、ライフワークとして速記の符号研究に取り組んだ。

昨年5月に大腸がんが判明。手術後の昨年10月ころから執筆を始め、息を引き取る10日前に書き上げたという。「頭の中にまとめてあったことを一気に書いていた感じで、背筋を伸ばしてどこか楽しそうに机に向かっていた」と妻の崎江さん(74)は振り返る。

内容は基礎符号や助詞、助動詞などの一覧と解説、寓意省略法についての考察など多岐に渡る。速記とともに歩んだ人生を振り返ってつづったエッセイも掲載した。

「美しき芸術の線求めつつ我は生きたし年齢経つるとも」(倉嶋さん)

東信ジャーナル 2015年3月28日(土)掲載

(平成27年)

私はここに、足掛け62年の速記集大成の道を歩きました。

かえりみれば、決して十分なものではないものであります。その面に於きまして、大変お世話になりましたことも併せて、お詫びと御礼を申し上げます。

速記は、日本のこれからのもの、皆のものであることを信じております。

平成27年2月 倉嶋 宏